

扶桑社の

「新しい歴史教科書」について

Column



〇与謝野晶子

〔情熱の歌人晶子〕 与謝野晶子(1878~1942)は、歌集『みだれ髪』(1901年)で一躍有名になった。そこには、例えば、「その子二十箇にながるる黒髪のおごりの春のうつくしきかな」という歌のように、みずみずしい新鮮な情感が歌い込まれていた。晶子の歌は、明治という時代の、自由な新しい感情表現の試みであり、それまでの形式を脱した新しい短歌の可能性を開いた。そう

した歌人としての活動と、与謝野鉄幹とのほげしい恋愛の末の結婚が話題となり、晶子は奔放な女性だというイメージが広がった。

さて、日露戦争のさい、晶子は旅順攻略戦に加わっていた弟のことを思い、「あゝをとうとよ君を泣く 君死にたまふことなかれ」という節で始まる有名な歌を発表した。この歌は当時、愛国心に欠けるとの非難を浴びた。しかし、晶子にとってそうした非難は心外であった。

というのも、晶子は戦争そのものに反対したというより、弟が製菓業をいとなむ自分の実家の跡取りであることから、その身を案じていたのだった。それだけ晶子は家の存続を重く心に留めていた女性であった。実際、晶子は、大正期の平塚らいてうらの婦人運動を当初支持したが、晶子の人生観や思想そのものは、家や家族を重んじる着実なものであった。晶子自身は歌人として活動を続けながら、大家族の主婦として、妻や母としてのつとめを果たし続けた。夫であり、12人の子の父であり、文学上の同志であった鉄幹の死を、晶子は万感の思いを込めて次のように歌った。

筆らかに今三とせほど
十とせほど二十年ほども
いまさましかば



〇与謝野晶子の歌集『みだれ髪』

新しい歴史教科書をつくる会主導で作られた教科書の採択をめぐる韓国、中国、アジア諸国から批判及び修正要求が出されています。ぼてい、つーまんの会ではこの教科書が女性とどうとらえているか、未来に何ける社の員として平等に生きてゆけるための教科書だろかという気がなるところでは。左記の文はこの教科書p.235 与謝野 晶子 についてのコラムです

「男女共同参画社会基本法」も できていることだし 公務員こそ“ジェンダー克服プログラム”の早期導入を!

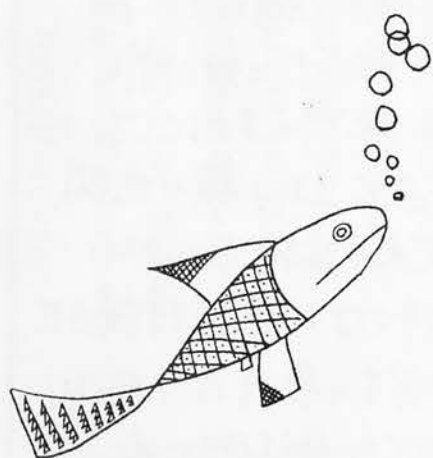
「女にお茶くみ」も、女性の非効率的な働かせ方としてもう20年前から問題になり、気付いた会社は取り止めているのに、親方日の丸の官公庁は勤務時間にこんなことをさせている。参加させられた女性職員は本務がおくれて残業をしたのではないかと痛ましい。この茶業係とはなんだろう。これ専門で公務員の給料をもらっているのであらうか。また、参加させられたのは女性で指導は男性という構図も気にかかる。男は汲まないが指導はするということか。男女共同参画社会基本法が施行されて2年、「女性にお茶くみ」のほかにも無意識に刷り込まれた偏った女性観を全官公庁で洗い出して修正し、新しい価値観を共有して事に当って欲しい。

県庁で女性職員にお茶教室 鹿児島

鹿児島県農産課が7日、農政部の女性職員だけを対象にお茶の入れ方教室を開いた。終了後に開催を知った同じ県庁内の男女共同参画室は「研修などで役割分担の悪い例としてまず例示されるのが『女はお茶くみ』なのに、信じられない」と厳重注意。同課は「今後は男女を対象にした教室も開きたい」と釈明した。

「性分担の悪例」 男女共同参画室かんかん

教室は「県庁に来たお客さんにおいしいお茶を出すため」との趣旨で、茶業係が1日「各課2人をめどに女性職員(係長級を含む)」「他意はない」というものに参加させてほしい」と要請して催された。この日受講したのは主事や臨時職員ら女性約20人。日本茶インストラクター資格を持つ茶業係の男性職員が1時間ほどお茶の淹れ方を教えた。永里明美室長は「行政が最初に姿勢を正さなくてはならないのに」と憤慨。注意を受けた農産課の佐野岩男技術補佐は「お茶を入れる機会が一番多いので女性を対象にしただけ。他意はない」と話していた。



(第3種郵便物認可)

毎月 4/5

女性職員だけが参加した「お茶の

